

閉ざされた 祭り

君島恒星

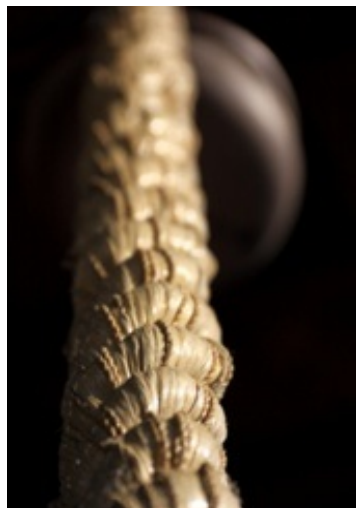


はじめまして...

自分と違う世界を覗いてみたいと思ったことはありませんか？
ちょっと小さな創作の世界に入ってみるのもいいかもしれません。
小さなドラマが小さな刺激になりますように！

「閉ざされた祭り」

君島恒星



サイレンを響かせながら救急車は爆走していた。

その箱の中に横たわっている僕。

振動が動かない身体を揺らしていた。

笑みを浮かべながら僕を見下ろしている、白衣の男が3人いた。

「意識はあるみたいだな」

「そうか、まずいな」

ひとりの男が注射器に手際よく薬品を入れて、僕の首筋に針を突き刺した。

避けようとしても動けない。

唯一自由にできる涙がこみ上げてくる。

「こいつ泣いているぜ」

僕は悔しさの中、だんだんと意識が薄れていった。

あの祭が僕の愛する人達を...

そして自分までをも殺してしまうなんて...

全てはあの夏から始まった。

浅い眠りの中をさまよっている、休日の朝。

まどろんだ空間の中で電子音が僕を呼んでいた。

無意識の自分がベッドの横にある携帯に手を伸ばした。

現実だった。

「もしもし、田村ですが...ゴホッ」

寝起きの声がしゃがれていたので、咳をしてごまかした。

ぼんやりと見える時計は10時を表示していた。

「もしもし、田村洋一さんでしょうか。こちら『週刊ジャスト』のものですが、お話をお伺いしたいと思ひまして、お電話しました」

好感の持てる女性の声が耳を刺激した。

週刊ジャストといえば、3流の週刊誌だが発行部数は多い。

「雑誌社の方が、どういうご用でしょうか？」

「田村さんのお知り合いでした、青木千春さんのことについてなんです...」

あまり思い出したくない過去だった。

「千春は去年、自殺したんです」

「はい、存じております。もうすぐ一周忌だと思いますが、そのことについて取材させていただけないでしょうか？」

「僕なんかよりも、千春の家族に...そう、御両親に聞いたらいかがですか？」

「はい、御両親にもお話は聞いています。その上で、恋人でした田村さんのお話を聞きたいと思ひまして...」

「そうですかね。あの時警察にも説明しましたよ。新しいことなんて何もないと思うけど...1年前だし」

「ええ、それでけっこうです。千春さんは去年、長野県の式之神祭に参加した後、東京で投身自殺なさいましたね。あの祭がまた今年も行われます。不信な点があるんです。どうしても納得できないことがあるんです。ほんの少しの時間だけでけっこうですから、お会いできないでしょうか？」

「不信な点ですか？ どのような...面倒くさいことはいやですよ」

「そんなことはないです。きっと田村さんも心のどこかで納得できなかったことだと思うのですが？」

「僕がですか...」

僕も千春の自殺については不信感をもっていた。それに雑誌の取材というものもされてみたかったし、電話の向こうの声のきれいな彼女に興味も湧いていた。

「...じゃあ、今日は休みで予定もないので少しなら、いいですよ」

「ありがとうございます。わたし『週刊ジャスト』の記者で西川美穂と申します。さっそくですが、これからそちらにお伺いしてよろしいでしょうか？」

「そちらって？ 僕のマンションにですか？」

「勝手言って申し訳ありません。他の人に聞かれたくないもので...」

「わかりました。では、ここで。場所はですね...」

「わかっています。調べさせてもらいました。じゃあ、1時間後にお伺いさせていただきます」
さすがに雑誌の記者だけあって、準備万端だ。

それにしても、いまさら千春のどんなことを聞きたいというのだろうか。

僕達の全ては、あの日突然に、終わりを告げてしまった。

それも事故とかではなく、自殺という形で...

照りつく日差しが、マンションのベランダに差し込んでいた。

もうすぐ8月。

今年も暑い日が続きそうだ。

ベランダから身を乗り出して景色を見つめる。

門前仲町のマンションの5階からだと銀座方面のビルが、スモッグにぼやけて墓石のようにも見えた。

僕は田村洋一、29歳。大川交通の銀座本社で経理の仕事をしている。大川交通は全国規模で福祉関係の交通手段を委託されていて、各市町村にある養護施設への送り迎えや、老人の介護など福祉システムに介入しているのだ。仕事も仕事量も安定している地味な会社だった。

そんな僕の地味な生活が嵐に襲われた。

去年の8月14日に、恋人の青木千春が銀座のオフィスビルから飛び降りて、自殺をしたのだ。予期せぬ出来事だった。

千春は去年、新人女子社員として本社に入社してきた。

僕は結婚に焦るのだけはやめようと思っていた。いつでも自分の気持ちに素直でいたかったのだ。しかし、入社したての千春を見た瞬間全ての感心は彼女に集中した。

はっきりと、ひらめきがあったのだ。

何度かデートをかさね、僕は素直に自分の気持ちを千春に伝えた。すると千春は、真面目な顔になって。

「わたしも田村さんを見た時、湧き出るような感情を感じたんです」

と、ちょっと芝居がかっていたが、熱く答えてくれた。その台詞の後、笑っていたが本心は笑っていないと確信するものがあつた。

トントン拍子とはよく言ったもので、まさにそのリズム、その感じで、僕達は急速に熱していった。僕達はお金がある程度貯まったらサラリーマンを辞めて、山の中にペンションを建てようと意気投合した。同じ夢を語れる相手だったので、結婚という儀式などあたりまえのような、ちっぽけなものに感じてきていた。

夏になると大川交通には面白いイベントがある。

会社の役員達は、長野県式之神市の出身者で固められていた。

毎年8月13日から15日まで式之神市で式之神祭が行われる。その式之神祭の主催者として役員の名前が列記されているのだ。式之神祭は三日三晩行われ、神社の境内で毎夜宴会が行われる。その宴会の席の手伝いとして、大川交通の新入女子社員が毎年参加することになっている。

去年の祭に千春は参加した。

そして連絡もなしに祭を抜け出し、東京に戻り、会社近くのビルの屋上から投身自殺をしたのだ。

何で千春は祭を抜け出し、自殺をしなくてはならなかったのだろうか？

千春は式之神に行く前日に「わたし、お祭大好き人間だから思いっきり楽しんできちゃうわよ」 と楽しそうに言っていた。

自殺する素振りなどなかった。

ひとことぐらい相談があってもよかったのに...

千春と僕の仲はそんな薄っぺらなものではなかったはずだ。少なくとも、僕はそう思っていた。千春の気持ちは違っていたのだろうか。ただの遊び...芝居だったのか？ 亡くなった今では何も知ることはできない。

千春の遺品の中にも何ひとつ、僕に対するメッセージは残っていなかった。普通、結婚を約束している相手なら、何かしら残すものではないのか？

いまだに不思議な事は、千春は遊園地の観覧車にも乗れない高所恐怖症だったのに、なぜ、高い屋上から飛び降りたのかということだ。高い所が怖い人間が、高い所を死に場所を選ぶのだろうか？

僕にとっては、千春の自殺全てが理解できない出来事だったのだ。

玄関のチャイムが鳴り響く。

『週刊ジャスト』が来たのだらうと思い、ベランダのサッシを閉め、クーラーのスイッチを入れた。玄関のドアスコープを覗くと、飛び上がるほどびっくりした。広角レンズの画面に千春が立っているのだ。死んだはずの千春が...

いや、そんなはずはない。

よく見ると千春ではない。似ている女性だった。

慌ててドアチェーンを外し、ドアを開けながら声をかけた。

「どちらさまでしょうか？」

「先ほど電話しました『週刊ジャスト』の西川と申します」

ドアを開けると西川美穂は微笑みかけた。

「どうも...」

「すみません。早々におじゃまして」

僕は西川美穂の顔をボーと見ていたらしい。その視線を感じて美穂は照れ笑いを浮かべた。

「そんなに見つめられると、照れちゃいますよ」

「いいえ、失礼。ちょっとびっくりしちゃって...すみません」

「わたしが千春さんに似ているからかしら？」

「そうですね。似ていますよね。千春を知っていたのですか？」

「いいえ、あの頃の記事の写真を見たんです」

「そうですか、びっくりしましたよ。千春が生きていたのかと思ったくらいだ」

「でも、顔のパーツひとつひとつ見てみると、それほどじゃないのよ。雰囲気似ているのかな。千春さんの写真を見て、わたしはそう思っています。髪の色も似せてきたんですよ。電話で断われたら、こうやって呼び鈴を押そうと思っていました。千春さんに似ていれば田村さんも取材断われないだろうと思って...努力しているでしょう？」

美穂はハンカチで顔の汗を拭った。

「いや、ベランダから来られなくてよかった。本当に幽霊だと思いますからね。あ、ごめんなさい。暑いんですよね。玄関ではなんですから、中へどうぞ。散らかっていますが」

「すみません。これ、差し入れ...アイスクリームです。どうぞ」

美穂はアイスクリームの包を差し出した。

去年の夏、よく千春はアイスクリームを買ってきてくれた。

このマンションの近くにある、自然にこだわったお店のアイスクリームだった。

美穂も同じアイスクリームを持ってきたのだ。いけないとは思うが、どうしても千春とだぶらせて見てしまう。

「ここのアイスクリーム、ここらへんでは有名なんですよ。この間うちの雑誌でも扱ったことがあるので買ってきたんです。美味しいんですよ」

「ええ、知っています。あまり甘くなくて...それでいてコクがあって、よく千春が買ってきてく

れました。どうぞ、クーラーの前に、あ、ベッドの方は散らかっていますけど、気にしないでください。ワンルールの宿命みたいなものですから」

ベッドの横に置いてあるテーブルセットの椅子をすすめた。

僕はアイスクリーム用のお皿とウーロン茶をだしてテーブルについた。

用意をしている間、美穂は狭いワンルームマンションの部屋の中を見回していた。

ログハウスの写真に見入っていた。

「ログハウス、好きなんですか？」

「ええ、いつか持ちたいと思っています。ペンション経営が夢だったんです」

「過去形ですか？　これからなのに」

「ペンションは、千春といっしょにと思っていたから...」

「あ、ごめんなさい」

美穂は深々と頭を下げた。

「で、聞きたいというのは、どのようなことなのですか？」

「ええ実は、うちの資料室で千春さんの写真を見かけたんです。わたしに似ていたので興味を持ちました。あの頃の記事は全て読みました。でも、わたし納得できないんですよ。何が？　と言われると確実なことは答えられないんですが、全てが取り繕われているような気がしてならないんです。ああ、アイスクリームわたしがやります」

美穂はアイスクリームをすくおうと思っていた僕の手からスプーンを奪い、器用に皿に盛りつけていった。

「普通、自殺とわかっていても解剖をするのですが、千春さんの時はおこなわれませんでした。どなたか、反対された方がいらっしゃったのでしょうか？」

「あの時は警察の方の言われるままにしていました。千春の両親もです。普通は解剖するものなのですか？」

「ええ、普通はそうです。でもおこなわれなかったのです。何故でしょう？　あと時間の問題です」

「時間ですか？」

「普通、投身自殺の時、自殺された方が落ちたのを誰かが発見して、警察に通報しますよね。でも千春さんの時は違うんです。あの時の第一発見者となっている黒木さんは、パトカーのサイレンの音が聞こえたのでビルの外を覗いたら、千春さんが植え込みの中に落ちているのを発見したと言っています。サイレンが聞こえているので、パトカーが来ると思ったのだけれども用心のため、警察に連絡を入れています。パトカーはすぐに来たので、はじめに聞こえたサイレンのパトカーが駆けつけたのだらうと思ったらしいのです。ということは、黒木さんより早い発見者がいたことになるのですが、警察の調書には黒木さんが第一発見者になっているのです」

「違うパトカーだったのかな？」

「調書にはパトカーではなく、サイレンに似た音を聞いたのだらうということになっています。あの時間に、あの場所で、他のパトカーはサイレンを鳴らしていないということです。でも現実には、そこにサイレンを鳴らしたパトカーがいたんです。黒木さんの言うことを信じれば、物理

的にパトカーがそんなに早く来ることは無理だと思うんです」

「ということは、他の誰かが黒木さんよりも早く通報したということですか？」

「そう、名乗れない発見者がいたと考えるのが自然だと思います。そして警察もその発見者がいなかったように調書を書いたということです」

「でも何のために？ 発見者は自殺事件に巻き込まれたくなかったのかな？」

「そうだと思います。でも、調書に匿名電話の件は記されていない...やっぱりおかしいんです。田村さんなりに何か気がついた事はありませんか？ なんでもいいんです。あったら教えてもらいたいんです」

「事件の後で気がついて、誰にも言っていないんですが、千春は高所恐怖症だったんです。高い所が嫌いな人間がビルから飛び降りると思いますか？」

美穂の目が輝いた。

「凄い。それ、本当の話ですか？」

「ええ、でも僕に嘘をついていたのかもしれませんがよね。高い所は嫌いだと...」

「何のために？ 甘えるため？ その確率は低いと思うわ。それに、恋人である田村さんに連絡しないというのもおかしいわ」

「確かに連絡はありませんでした」

「千春さんは、連絡をとりたくてもとれなかったのではないかと思うんです」

「どういうことですか？」

「それはわかりません。でも、式之神祭で何かがあったというのが、考えやすいと思いませんか？」

「ええ、同感です」

美穂は鞆からノートを取り出してめくった。

「わたし長野の式之神祭を少し調べようとしたんです。でも、東京では式之神祭の資料がまったくといっていいほど無いんです。式之神祭は田村さんの大川交通の役員達が介入して行っていますね」

「みんな式之神市出身なんです」

「式之神祭について、何か内容を知ってますか？」

「残念ながら、何も...社内でも雲の上の話だし、参加してきた女性社員も話題にしたことがないと思います。式之神祭にふれてはいけないという風潮があるんです」

「そうですか...きっと口外してはいけない何かがあるんだわ。不思議ついでに、式之神出身の人物に外務大臣の佐藤雅弘、文部大臣の藤田英一朗もいるんです。他に、今の日本の国務大臣達の名前も目にしました。今はほとんど他に移っていますが、みんな何らかの形で式之神に関係しているんです」

「本当ですか？」

「日本のお偉いさんが夏の式之神祭に集まるんですよ。ずっと昔から...このことがわかった時、千春さんの自殺に何かが隠されていると感じたんです。そして今日、田村さんの話を聞いて取材する価値があると確信しました。わたし、式之神に行って祭の事を調べてきます。地元には資料

があるでしょうから。帰ったら又話を聞かせてください。違う角度から見ることができるかもしれないわ。式之神祭の時には、また式之神に行って取材をしようと思っています」

「その時は僕も一緒に行ってもいいでしょうか？ 千春の事、僕も疑問に思ってきたんです。どうせ式之神祭の間、会社は休みですし」

「見に行くぐらいでしたら大丈夫だと思うわ。なんだか、同志ができたみたい。とにかくどのような祭なのだから調べるのが先決ね」

美穂は僕を見つめてエクボを見せた。

その笑顔がやけに千春に似ているので、切なくなった。

あいかわらず暑い夏だった。

週刊ジャストの美穂が帰ってくる予定の日だったので会社は早退して、ベランダから夕焼けを眺めていた。

日が落ちても蒸し暑い。

缶ビールのプルトップを引き、泡立つものをいっきに喉に流しこんだ。各地で水不足が騒がれているのに悪いみたいだ。

美穂がこのマンションを訪れてから3日が過ぎていた。

千春に似ているからだろうか、引き付けられる魅力を感じていた。

今朝、美穂の夢を見てしまった。千春と行った遊園地の夢なのだが、相手は千春でなく美穂だったのだ。僕は夢の中に出てきた女に惚れる癖がある。美穂に対するせつなさが持続していた。

会社がからんでいる式之神祭が、千春を自殺に追い込んだのかもしれないという疑問が、仕事をしていても頭の中を掛け巡っていた。すっきりしないというのが、実際の気持ちだった。そして式之神祭を見てみたいという気持ちが膨れあがってくる。うちの会社が仕切っている祭といえども、上層部での話して、その内容は何ひとつ知らされていなかった。社員も聞いてはいけない雰囲気だし、手伝いに行ってきた女子社員も話題にはしない。中には、式之神祭の記憶がないと言って、ごまかしている女子社員もいるらしい。そういえば、マスコミにも扱われたことがない。全てが閉ざされた祭だった。本当におこなわれているのか？ という疑問も湧いてくる。

大川交通は福祉関係の仕事を、市町村から受注しているが、創業時の入札は形だけで、当時の厚生大臣の一言で決まったそうである。全国規模での仕事の確立もうなずける。仕事は国から受注していると言っても過言ではない。いわば、日の丸を背負った安定会社といっていいたろう。長野県式之神市出身の大川交通の役員と当時の厚生大臣との間に切っても切れない縁があるとするならば、出身地と式之神祭なのではないだろうか。千春の自殺が、美穂の言うように祭のせいだとすると、立証したとたんに、大川交通の今後が無くなってしまうかもしれないという不安が残る。

でも、千春のために...いや千春は亡くなっている。あえて言うならば、美穂の取材のためならば、会社が窮地にたたされてもかまわないという気持ちになっていた。

玄関の呼び鈴が暑そうに鳴った。

「こんばんわ『週刊ジャスト』の西川です。田村さんいますか？」

あわてて玄関のドアを開ける。

「お帰りなさい。さあ、中に入って」

「ありがとう。これおみやげ。式之神は何もない所なのよ。でも、温泉は出ていたから、気持ちよかったわ。山脈を見上げながら露天風呂で冷えた地酒をグイッと...というわけで、おみやげはどこにでもある野沢菜漬け...だけどこれって健康食なのよ。ごめ一ん。一気にしゃべっちゃって。まだ会って2回目なのに...いつもなれなれしいわけではないのよ」

芝居じみた言い方が、千春に似ている。

「あんまり甘いことを言っていると、男はつけあがりますよ。シャワーでも浴びる？」

美穂はあわてて、手を振って否定した。

「いいえ、シャワーはいいですよ。冗談はよしてください。あ、ほらなんだか、田村さんの感じがやさしいからかしら。甘えちゃって...それより、あの式之神祭ってとんでもない祭だったわ」

美穂は、この間座った席に自然とついた。

「今日は、缶ビールでいいでしょう？」

「ありがとう。コップもいただけます？ 缶のまま飲むのって、得意じゃないのよ」

「発砲がきついからね」

「よくわかってる」

「千春もそうだったから」

言ってからしまったと思った。あまり千春と比べてはいけない。嫌われたくなかった。

僕がビールをセットしていると、美穂はおみやげの野沢菜を切りはじめた。一口つまんで、指でオーケーを僕に投げつけた。

「あの式之神祭の資料は、式之神に行ってもなかったの。というよりも式之神市図書館の特別図書の中にあると言われていたんだけど、外部の閲覧は許されなかったわ。でも、わたしが泊まったペンション「パラレル」のオーナーが集めていた式之神の資料の中に偶然見つけたのよ。昔からの日本の祭は、男と女が1年に1度何も気にせず、無礼講でつきあえる日だったのよね。つきあうというのはズバリ、セックスなのよ」

ペンションと聞くと千春を思い出す。でも感傷にひたっている場合じゃなかった。

「それ聞いたことがあるよ。祭で結ばれた夫婦は幸せになるとか、昔から祭とセックスは切っても切れないものがあったというしね」

「そうらしいの。昔は式之神祭もそのものズバリの祭だったらしいわ。東之西山という山の中に、東師神社と西師神社というふたつの神社があるのだけど、そのふたつの神社の祭りなのよ。3つの御神体を裸の男達が奪い合いながら、今年は東師神社から西師神社に移動していくの。西師神社の境内には女達によって酒の用意がされ、その夜は男達と女達の交わりの宴会になるというわけ。ここで出来た子供は神の子として縁起のいいものとされていたらしいわ。この行事は三日三晩続いて、2日目には東師神社にもどって、3日目には又西師神社に移るの。ということは、御神体はその年にあった神社から、もうひとつの神社に移動することになるわけ。3つの御神体は、鏡・剣・玉なのよ。そして毎年違う神社に奉納されるというわけよ」

「三日三晩か...すごい祭だな。その御神体はもしかしたら天皇家に伝わっている三種の神器と同じようなものなのかな？」

「そうかもね。三種の神器も鏡・剣・玉だったわよね。意識しているのは確かだと思うわ」

「そんな祭だとわかっていたら、千春を行かせはしなかったのに」

「田村さんい、くらなんでも、今はそんなことしてないわよ。全ては昔の話よ。男の人達も裸ではなくふんどしをつけているらしいし、宴会でのフリーセックスもないわ。今の世の中、親のいない子供をそう簡単につくれないでしょう？」

「そりゃそうだけど、誰も見ていないんでしょう？ その祭を見るためには、東之西山に登らな

くちやいけないのかな？」

「そうなのよ。実はこの式之神祭はいまだに秘密主義の祭なんですって。取材も入れないらしいの。不思議な事に、マスコミは知らないのか、避けているのか、この祭を取材した人はいないのよ。なぜかという、東之西山は神の山として崇められているから、出入りできるのは神社関係者だけで、一般の人は一切入山もできないのよ」

「潜り込むしかないのか」

「そうね」

「でも、潜り込むだけの価値があるのかい？」

「式之神のホテルや旅館の予約を調べてきたわ。やはり外務大臣の佐藤や文部大臣の藤田が宿泊する予定になっていた。もちろん偽名で行く人もいるだろうし、祭を確認する価値はあると思うの。いままで取材した人は誰もいないし、祭自体、世間では知られていないのよ。式之神祭の取材だけでも価値があるわ。もちろん、千春さんのことが少しでも祭に関係あることだと解れば、もっと信じられない展開になると思うけど」

「行こう！ 来週だね」

「そう思って、ペンションを予約しておいたわ。露天風呂があるし、美味しいお酒も飲めるのよ。オーナーは昔からの地元の人ではないし、祭に侵入しようということもばれない。田村さん、車の移動は大丈夫？」

「ああ、車で行く？」

「あっちで足が欲しいし、山に入るには小型の四駆がいいと思うのよ。わたしのジムニーで行きましょう」

「ジムニーは、小回りがきいていい車だよね。ねえ、この部屋にも美味しい日本酒が冷えているんだけど、シャワーでも浴びて飲まない？」

「またシャワーに誘うんだから。しつこい...でも、部屋に帰っても誰もいないし、失礼してお借りしちゃおうかな。ここらへんにコインランドリーはないかしら？」

美穂は鞆を指さした。

「洗濯なら洗面所に洗濯機が置いてあるから使えばいい。乾燥機はないけど、一晩外に干しておけば乾いちゃうよ」

「いいの？ ありがとう。でもそれって、一晩泊まっていけってということ？」

上目づかいの大きな目が刺激する。

「美穂さんさえよかったら...いや、変な意味じゃなくって、もっと話をしたいと思ってさ。抱きたいとか、そんなんじゃないよ」

美穂はやさしく目を閉じて、何やら念じているようだった。

「どうしたの？」

「ちょっと千春さんを意識して報告させてもらいました。田村さんて、ストレートに言葉にするタイプね。じゃあ、シャワーの前にコンビニに行って買い出ししてくるわ。夜は長いしお腹もすいちゃった」

「よし、いっしょに行こう。荷物持ちだ」

「田村さん、それって女心をくすぐるわ」

ジムニーが木に囲まれた山道を上り抜けると、視界が開けた。

一面に田畑が広がり弍之神市が一望できた。

建物は駅の回りに集中していた。

回りを山脈に囲まれ、南側に目立った山がそびえている。東之西山といい、あの中に東師神社と西師神社があるという。北側の山脈のふもとにある御子之駅前には、大きな観光ホテルが建っていて、その回りに旅館、民宿、ペンションがまとまっている。

冬はスキー客でいっぱいになるらしい。温泉とスキーはとてもいいコンビだ。夏はこの地方にとってはオフシーズンなのだろう。北の山脈にはスキーコースと思われるものが、何本もの枯れた川のように見えた。

美穂がこの間泊まったというペンション『パラレル』につく。

しっかりとした作りのログハウスだ。カナダ産の木材を使用している。手入れが行き届いていて、木材は明るい色を保っていた。

駅前のホテルは満室らしいのに、民宿やペンションは弍之神祭の前日でも、夏の客は少ないらしい。それだけ弍之神祭は見物人のいない、祭をやる側の祭だということがいえる。

「また、お世話になります」

ペンションの玄関から顔を出した人のよさそうなオーナー夫婦に、美穂が挨拶をした。

「西川さん、お待ちしてました。今度は彼もいっしょですか？」

「こちら、田村さんです。こちらはここのオーナーの山口さんご夫婦」

「よろしくお願いします。立派なログハウスですね」

「ありがとう。けっこう無理して購入しましたからね。身分不相応なのはよくわかっています」

山口オーナーが右手を出したので、硬い握手をした。

人間というのは不思議なもので、スキンシップをするだけで好感を持ってしまう。

山口さんは50歳くらいだろうか。脱サラをして、この町に来たと聞いている。

「そんな身分不相応だなんて...とっても素敵ですよ。似合っています」

山口オーナーの奥さんが言った。

「この人、このログハウスじゃないとペンションはやらないって言ったんですよ」

「男のこだわりですよ」

「そんなところかな？ 十分に泊まってやってください。こいつも喜ぶですよ。ところで部屋はこの間の部屋を用意しています。ふた部屋必要でしょうか？」

美穂は即答した。

「いいえ、1部屋でいいです。お風呂入れますか？ 車で来たから身体がガクガク」

「いつでもどうぞ。今日のお客さんはおふたりだけですので、ごゆっくりしてください。田村さん、日本酒は冷やでよろしいでしょうか？」

「はい、話に聞いていたので楽しみにしていたんです」

「ここらへんでは有名な『竜の舞』を楽しんでください」

「じゃあ行こうよ。洋一さん」

美穂は僕の手を引いて部屋に向かった。山口夫婦はやさしく見守っていた。

部屋は2階の南向きで、式之神市が見渡せた。東之西山も視界に入る。

「温泉につかって、汗流したらいっしょにホテルの取材に行ってくれないかしら？」

美穂は浴衣に着替えながら言う。

「いいけど、僕がいっしょに行くと足手まといにならないかな？」

「ううん、アベックだと疑われなくてすむからいいのよ。さあ、露天風呂に行こうよ。温泉、混浴、酒つきよ」

「混浴なの？」

僕は大きな声をあげてしまった。

露天風呂からは北側の山脈が一望できる。

冬の寒い時期に、雪に囲まれて入るのが最高だと思っていたが、夏の露天風呂も一風変わっていて気持ちがいい。

僕は服を脱ぐのが早かったので、先に湯につかった。つかったとたんに美穂が姿をあらわした。

美穂は下だけタオルで隠して湯に入った。バストが見た目よりも大きいのでびっくりした。自然と視線は景色に外れた。女性の裸を日の光の下で見るのは初めてかもしれない。お湯から出られない状態に下半身は硬直してしまった。美穂はそんなことには気がつかないようだ。

「あー、いい気持ち。手足を伸ばすと生き返ったみたい」

「うん、気持ちがいい」

露天風呂を覆っている柵の外から山口オーナーの声が響いた。

「田村さん。入っていますか？ お酒流しますよ」

「はい、ありがとうございます」

柵の間から、樽に乗った日本酒が流れてきた。美穂がお酒に飛びつく。

「これこれ、これがなくちゃね。はい」

僕にお猪口を渡し、氷から出した冷酒を注いでくれた。僕も美穂のお猪口に注ぐ。

乾杯。

あつい温泉に冷たい日本酒。身体中にしみわたる。

「あー、おいしい」

「うん、うまい。いい場所を見つけたね。オーナーの山口さんもいい人みたいだし」

美穂はペロッと舌をだした。

「実はね、山口さんはわたしの会社にいた人なのよ。あの有名な『週刊ストップ』の編集長だったの。知っている？」

「『週刊ストップ』といえば、3年くらい前に廃刊になったやつかい。スクープばかり書く雑誌だったよね」

「そうなの、政治家の批判発言を少し書いただけで、圧力がかかって廃刊。創刊のときから目を

つけられていたのよ。そして山口さんは資料室長に回された。でも、すぐに辞めてこのペンションを建てたのよ。奥さんが調理師免許を持っていたので、すすめたんじゃないかしら。実はこの式之神祭の存在を、はじめに教えてくれたのも山口さんだったのよ」

「山口オーナーも大変だっただろうね。じゃあ、式之神祭に政治家が絡んでいることを詳しく知っているんじゃないかな？ 何か情報をもらったら？ そうだ、いっしょに取材すればいいじゃない？」

「ううん、山口さんの知っていることは教えてもらったし、祭の資料も黙って見せてくれた。わたしが式之神祭のためにここに来ていることも知っている。後は自分でやれるところまでやってみたいの...山口さんの力はもう借りたくないの...」

「そう...非力な僕でよければ協力させてもらうよ」

もしかしたら美穂は山口さんに憧れていた時があったのではないかと思った。ふたりの間に何かを引きずっているような気がしてならなかった。

美穂は思いきり伸びをして、お湯の中に顔まで沈んだ。

「気持ちいいわ。ねえ、洋一さんは運命って信じている？」

「運命？ 難しい質問だな。今、この露天風呂に美穂さんと僕がいるのは運命。千春が死んだのも運命。これからどうなるかというのも運命だけが知っている。僕達はただ流れに身をまかせているだけ...という考え方だろう。僕は運命なんて信じていないよ。自分の明日の行動は自分で決めたい」

「わたしもそうなの。何事も運命なのよ。と思うことは、すごく楽な生き方だと思うの。楽しいこと、悲しいことの全てを運命のせいにできるのだから。でもそうじゃない。わたしはわたしの力で切り開くわ。それがどうなろうと、それはわたしの力なのよ。流れに身をまかせているわけではないわ。そう思うでしょう」

「まったく同感」

「よかった。洋一さんがそういう人で」

美穂は日本酒をいっきに飲み干して、僕の前に立った。目の前に美穂の胸が広がる。僕の首を両手で抱き締めて、やさしくキスをする。僕も美穂の身体を抱き締める。身体があたたかい、燃えているみたいだ。

「これはわたしの気持ちよ。洋一さんを好きになっちゃったみたい」

「僕も一目見たときから...いや、千春に似ているからじゃないよ。美穂さんを好きになったんだ」

「好きになるのに言い訳はいらないわ」

抱き締める手に力が入った。

1 時間後、僕と美穂は御子之ホテルのロビーのソファに身を預けていた。美穂の手には手の平に入る小型カメラが握られている。ロビーの床には毛足の長い真っ赤な絨毯が、敷つめられていた。

「ずいぶん派手なホテルだね。こんなふかふかな絨毯なんて似合わないよ」

「この間来た時には、なかったわ。きっと祭り用なのよ。あ、あそこに来たのが藤田文部大臣よ」

年はとっているが、精力が満ち満ちている男が車を降りてロビーに入ってきた。よくニュースで見かける顔だった。美穂は手で隠した小型カメラのシャッターを押し続けている。ホテルのレストランなどを目立たないようにひと回りした。確かに、政界・財界から有名な大物がこの地を訪れている。

大川交通の役員達もその中にいた。僕の上役の上村も姿を表した。気付かれないように、美穂に身体を近づける。会社の女子社員達は近くの旅館にでも泊まっているのだろう。

「そろそろ、戻りましょう」

「もう、いいの？」

「ええ、確かに考えていた人達が集まってきたし、明日の祭が行われるのも確かだわ。後は明日、あの山に潜り込んで式之神祭を取材できればいい。ホテルにはS Pも多いし、危険だわ。それにもう 7 時...夕食が用意されている時間だと思うの」

僕達は肩を寄せながらホテルを出て、ペンション『パラレル』に足に向けた。

『パラレル』につくと、部屋には食事が用意されていた。ビールと日本酒を山口さんが持ってきてくれた。夏なので山菜料理と牛のステーキを用意したという。冬の寒い時期ならば猪鍋が美味しいという。山口オーナーが用意をしながら言った。

「収穫はありましたか？」

美穂は小型カメラを取り出して

「ええ、充分な手ごたえです。山口さんは弐之神祭を見たことはあるんですか？」

「いいえ、いくら地元に住んでいるとはいえ、祭の日にあの山へは入れません。神社で奏でるお囃子の音を聞くぐらいですよ。でも西川さん、わたしから情報を教えておいてなんですが、あまりあの祭に深入りしないほうがいいと思います。地元の人間ですら、神の祭として近づけないのですから」

「その点は充分に解っているつもりです。でもひとつだけ教えてほしいんです。あの東之西山に人知れず入山するには、どうしたらいいかしら？」

山口オーナーは困った顔をしたが、ポケットから手書きの地図を出してくれた。

「そういうことになるだろうと、地図を書いておいたんですよ。細かい道を歩かなくてはならないので、迷わないように用心してください。それに朝8時には警備の人間が各道に配置するので、その前に入山する必要があると思います」

「6時には潜入するつもりだったわ」

「田村さんも行かれるんですか？」

「そのつもりです。僕にも確かめたいことがありますし」

「千春さんのことですね。西川さんから聞いています。ふたりとも気をつけて行ってください。日本酒は先ほどの竜の舞を用意しました。ストックはありますから、いくらでもどうぞ」

「山口オーナーもいっしょにいかがですか？」

美穂がすすめたが、山口オーナーは手を振りながら

「いいえ、家内が待っていますから、じゃあ明日は5時頃に朝食を用意しておきます。私達は用意をしたらまた寝てしまうかもしれませんので、気をつけて行ってください」

「はい、どうぞかまわず寝てください。僕達のわがままで朝早いんだから。気にしないで」

「危険だと思ったら取材は止めることです。わざわざ自分を追いつめる必要はないですからね」

「わかっています。御忠告ありがとうございます」

山口オーナーが去って、ふたりっきりになると、美穂はしみじみと言った。

「昔の山口さんなら死んでも取材してこいって言っていただろうな…」

「そういう人だったんだ」

美穂はうなずき、吹っ切るように明るい表情を戻した。

「乾杯しよう」

ビールを注ぎながら美穂が言う。

「明日わたし達が山に入った後、神社の間を動くのは危険だと思うの」

「そうだね。ガードマンもいるみたいだし」

「だから明日の夜宴会のおこなわれる、西師神社の方に隠れていようと思うの。御神体の移動の取材は捨てるわ」

「その方がいいかもしれない。西師神社の方にいれば、3日間のうち2回チャンスがあるかもしれないからね」

「すごーい。3日間、山に入っているつもりなの？」

「美穂さんだってそのつもりだろう？ 3日間の非常食を持ってきたくせに」

「ばれてたのね」

「僕もつき合うよ」

「ありがとう。じゃあ乾杯」

「明日からの成功を祈って。乾杯！」

僕達は料理に箸をつけ、わざと式之神祭以外の話をした。

午前5時に起きる。今日もいい天気になりそうな空模様だった。1階の広間に朝食が用意されていた。そしてその横には弁当の包がふたつ並んでいた。もしかしたらジャーナリストの血が騒ぎ、山口オーナー自身が入山したいのではないかと疑りたくなった。

車で行ける所まで美穂のジムニーで行き、藪の中に車を隠して、あとはひたすら歩いた。西師神社の、祭の飾り付けは終わっていた。境内の横の林の中に身を隠す。境内全体を見渡せて、向こうからは見えにくい絶好の場所だった。美穂はサイレントタイプの超望遠カメラと赤外線カメラを用意していた。

午前6時30分だった。西師神社に御神体がつくのは午後5時頃、10時間あまり時間がある。

「まあ、気長にいきましょう」

と美穂が言う。このような待ち時間には、慣れているらしい。携帯のポケットトイレも持ってきている。臭いのしない虫避けも欠かさなかった。

午前9時から、両方の神社から御囃しが聞こえてきた。掛け合いとでもいえばいいのだろうか、お互いの神社が話をしているみたいだった。大太鼓が表に出され、叩かれる時を待つ。

12時頃から白い衣装に身を固めた女達が宴会の用意をしはじめた。うちの会社の女子社員達の顔も確認できた。去年は、千春もあの中にいたのだろう。山口オーナーに作ってもらった弁当を食べ、横になって昼寝をすることにした。美穂の隣に寝そべると女の臭いが漂ってくる。木の木漏れ日が目を刺激した。

午後4時になると、大太鼓が鳴り響いた。お腹に響く重圧感が辺りを包む。遠くで男達の声が響いている。

「ようやく始まったようね」

時間がたつにつれて、男達の声は大きくなっていく。大太鼓は打ち手を替えながら、鳴り響く。その音に負けじと、男達の声もリアルに聞こえてくるようになってきた。

全身を汗で光らせた男達が見え始めたのは、もう5時を回っていた。100人くらいのフンドシ姿の男達が神器を大切に、そして力強く奪い合いながら神社の境内に入ってきた。美穂の目の色が変わった。男達がフンドシ姿だからではない。

「A新聞社社長の市村がいるわ。B放送協会会長の吉田も、それにC電力会社会長の野川もよ」

美穂はカメラのシャッターを切りまくった。

三種の神器が境内に入ると、男達は弾む息を押し殺しながら並んで奉納をした。

宴会の用意はできていた。まだ明るい女達によって、境内の周り9ヶ所に設けられている薪ひとつひとつに、火が灯されていった。みんなで酒を注ぎあいながら、宴会は始まった。祭に参加している人は、首から身分証明書をぶら下げている。

僕達の隠れている近くにも、薪があった。周りが暗くなり始めた頃、僕は美穂に言った。

「普通の宴会だね。昔のようにフリーセックスにはならないようだ」

「そりゃそうよ。そんなことをしたら大変なことだわ。それよりも、これだけの人物が今ここに

集まっているのよ。これだけでも凄いことだわ。大スクープになるわ」

美穂はファインダーを覗きながらシャッターを切り、撮影位置を変えたがっている様子だった。

「でも、これでは千春の自殺には結び付かない」

「そうね...」

千春のことよりもスクープを前にして、気持ちが高ぶっているのがひしひしと伝わってきた。

「あら、何かしら？」

白い衣装を着た女性が、薪ひとつひとつに白い袋に入ったものを入れて回っている。僕達の前の薪にも入れられた。入れた後は黄色い煙が漂いはじめていた。甘い香りがして気持ちがリラックスしてくるようなのに、頭を中心を刺激されているみたいだった。

「ちょっとおかしいわ。ほら見て洋一さん！」

美穂が声を殺しながら叫んでいた。目の前の男と女が見る見る間に乱れて、抱き合い、お互いを求め合っているのだ。いままで普通に酒を飲んでいた人達が急に変貌してしまった。

「本当だったんだ。この祭は交わるための祭だったんだ」

美穂はカメラを覗いていたのだが、カメラを手放すと僕に身体をすり寄せてきた。うるんだ目が求めている。回りの雰囲気刺激されたのだろうか？ いいや違う。僕も美穂を求めているのだ。獣のように身体を抱き締め、美穂のジーパンを下げる。美穂はされるがままに、甘い美穂の喘ぎ声が口から漏れた。

境内の中は喘ぎ声でいっぱいだった。

「ああ、もう駄目だ！」

美穂の中に、僕の精液は勢いよくドクンドクンと飛び出した。

終わったと思ったとたんに、また欲しくなった。あそこもビンビンだ。今度は美穂の後ろから責める。力強く動いても美穂のあそこは吸い込むように反応した。身体中を愛撫しつくした時、また昇りつめた。でも、身体はまたまた女を欲しくなっていたのだった。なんだか変だった。求めても求めても欲望は納まることを知らないのだ。美穂も同じ感じだった。

境内の方を覗いて見ると、男が足りないのだろうか、20歳くらいの女性がひとりでオナニーをしていた。うちの会社の女性ではない。とても刺激的だった。僕はフラフラと誘い込まれるように、境内に出てその女性に飛びかかっていた。彼女も僕をやさしく抱き締めてくれ、唇で身体中を愛撫してくれた。挿入して腰を動かしても欲望はおさまりそうになかった。

横目で見ると美穂が他の男と交わっている。嫉妬心が身体中を掛け巡った時、防毒マスクをつけたガードマンらしき男達が叫んでいた。

「おまえら誰だ！」

「不法侵入者だ！」

防毒マスクをつけたガードマンが集まってくる。緊急を告げるトランシーバーの音と、マスクを通したくぐもった声が飛び交う。しかし回りの男女達は、僕達にはかまわず交わりあっている。ボーとした頭でそれらを見ている間に、僕と美穂はガードマンにつかまっていた。身体が思うように動かない。引きずられながら山を降りて行ったような気がした。

目が醒めると、殺風景な部屋のベッドに横たわっていた。

どこかのホテルだろうか？

美穂は？

上半身を起こすと、ツインルームなのだろう。隣のベッドにバスローブを着た美穂が寝ていた。僕もバスローブを着ている。

そしてもうひとり、僕達を見ている人がいた。うちの会社の上村だった。

「お目覚めかな。とんだことをしてくれたね」

上村の声で美穂も気がついたみたいだった。上村は話を続けた。

「知ってしまった事を忘れろとは言わない。しょうがないことだからね。君達もあのまま一晩中見つからずに眠ってしまっていたら、何もかも忘れていたのに...見つけてしまったので、連行するしかなかったんだ」

「あの薪の中に入れた白い袋は、錯乱させる薬か何かだったのか？」

上村はやれやれという顔をした。

「想像どおりだよ。あれは昔からの媚薬だ。それも男が発散する臭いに強く反応するらしい。つまり男性ホルモンと薬がいっしょになったとき、その威力が表れる。昔から使われているものだよ」

美穂が口をはさんだ。

「あの臭いを嗅ぐと、欲情して求めるわけね。そして3日間嗅ぎ続け、欲情し続けるとその間の記憶が曖昧になってしまうというわけなのね」

上村は驚いたように言う。

「頭のいいお嬢さんだ。そのとおり、昔からこの祭に参加するとストレスが発散される。男が男らしく、女が女らしくなれるのだ。昔のこの辺りの人達は、この祭のためだけに生活をしていたと言っても過言ではない。まあ、楽しみは祭だけだったと言ったほうが正しいかな。ストレスがなければ人間らしい判断もできるし、行動もできる。これがこの地から有名人・著名人がでた理由だと思っている。このことをどう思おうと君達の自由だ。でも、こととしだいによっては、この地を敵に回すことになるのを忘れないようにしてもらいたい」

「脅迫ですか？ この地というのは日本自身をさしているんですね。千春は...千春も去年のこの祭に参加していたのですか？ あの境内の中で...」

「千春？ ああ、去年亡くなった青木千春だね。田村君とは同じ課にいたんだったね。彼女はアレルギー体質だったらしい。あの媚薬を嗅いだとたんに、拒否反応を起こしてしまった。その場で急変してしまったんだ。避けられない事故だった」

美穂が叫んでいた。

「千春さんはここで亡くなったんですか？」

「そう」

「じゃあ、自殺は工作されたものだったのですね」

「そういうことになるかな。あまり詮索しないほうが、お互いのためだと思うが」

殴りかかりたい気持ちを押さえた。上村を殴ったところで復讐にはならない。もっと大きなものが千春を殺したのだから...僕は気持ちを落ちつかせながら静かに言った。

「ならば全てが納得できます。何故自殺の前に僕に連絡がなかったのか。何故目撃者が電話する前にパトカーが来たのか。何故高所恐怖症の千春が、高い所から飛び降りたのか...」

僕は涙が流れてきた。

上村は相変わらず落ち着いて話す。

「青木千春は高所恐怖症だったのか...事故だったんだよ。君達もわかるだろう。ここの祭がどれだけ人格向上に役立っているのかを。いわば政治の、いや日本のための祭なんだよ。これは絶対になくしてはならない。守らなくてはならないものなんだ。そう思っている。君達は自由に帰るたまえ。車はこのホテルの駐車場に持ってきてある。あと、データは全部消去していたよ。せっかく撮ったのに残念だった。デジタル機器には良くあることだ。気をつけて帰ってくれ」

上村は目を落とすと、足早に部屋から出て行った。

祭は今日も行われているのだろう。御囃しのリズムが遠くから聞こえている。

「帰るしかないかな？」

「ええ、早くこのホテルから出たほうがいいみたいね。きっと見張られているわ」

僕達はホテルのフロントを何喰わぬ顔して通り、車に乗り込み東京に向かった。式之神を背中に感じながら山道に入ってしまった。運転をしている美穂は、ホテルを出た時から沈黙を守っている。

「何考えているんだ？」

「なんで私達を自由にしたのかしら？ 私達に式之神祭の全てを話して、秘密が漏れるとは思わないのかしら？ 記事にされると思わないのかしら？」

「信用したのさ。僕は同じ会社の人間だし。まさか、僕達を殺すことは出来ないだろう。治安国家日本で…」

「でも千春さんは、その治安国家日本を動かしている人達に体裁よく殺されたようなものじゃない。わざわざ東京で自殺に見せかけるなんて、並の組織じゃできないことよ」

「…」

「あ、ごめんなさい。洋一さんの気持ちも考えないで…」

車は峠道を上り終え下り坂にさしかかった。その時小さな爆発音が車内に響いた。

「何か音がしたわ。何かしら？ あ！ なに！ ブレーキが効かないわ！」

道は長い下り坂だ。美穂は右足でスコンスコンと音をたてながらブレーキを踏むのだが、スピードは増すばかりだった。

「エンジンプレーキだ！ サイドブレーキも引くんだ！」

美穂はギヤーをローに入れた。

高回転のエンジン音が恐怖を増長させた。道路はスキーの大回転のように、急に曲がりくねっている。

スピードは落ちない。思い切ってサイドブレーキを引いてみる。後輪がロックして車体が横滑りを起こしながらコントロールできなくなっていった。目の前にガードレールが見えたと思った時、強いショックと白い煙に包まれた。

どうやら、ぶつかって止まったようだった。シートベルトが肩に食い込んで痛い。ボンネットからは白い蒸気が吹き出していた。美穂は自分で首を揉んでいる。無事らしい。

「やられたわ。さっきの爆発よ。ブレーキに細工されたんだわ。峠の一番上でやるなんて卑怯よ！」

外に出て車を見るが、動きそうになかった。

「ダメだな」

「とにかく助かっただけでもよかったわ。車は捨てましょう。ここにはいたくないわ。殺されそうになったのよ、私達！」

「よし近くの駅に出よう」

僕はバックから地図を取り出した。

「ちょうど2キロ先に、あぜくら駅がある。そこから乗ろう。歩けるかい？」

「ええ、大丈夫よ」

5分ぐらい歩いた時、捨ててきた車の辺りで爆発音がした。きっとガソリンが漏れて引火したのだろう。黙って歩いている美穂の後ろ姿には、恐怖が覆っている。本当に殺すつもりだったのだろうか...誰が...弑之神祭を知ったから？

急に後ろから車が近づいてきた。僕達は身構えたが、その車が山口オーナーのものだとわかると安心した。山口オーナーは心配そうな目で僕達を見つめた。

「大丈夫だったか？ 怪我はないか？」

僕達はうなずいた。

「胸騒ぎがしたんで山の麓に留めたジムニーを見張っていたんだ。すると、奴らが藪の中から引きずり出して御子之ホテルに持って行ってしまった。ふたりが捕まったのだと思って、駐車場で見張っていたんだ。しかし恥ずかしい話だけど居眠りをしてしまって、気がついたらジムニーがない。東京に向かったのだと思って追いかけた時に爆発音がしたのでびっくりしたんだ。無事でよかった」

「ええ、大丈夫です」

「電車で帰るつもりだろう？ 乗っていきなさい」

僕達は山口オーナーの車に乗り込んだ。車内では皆、無言だった。エンジンの音だけが響いた。山口オーナーは駅に近づいた時に言った。

「僕にできることはこのくらいだ。僕は弑之神祭のことは何も知らないことになっている。ふたりも忘れることだ」

僕達は返事をしなかった。

山口オーナーは弑之神祭の内容を知っているような言い方だった。ならば何故僕達を止めなかったのだろうか。取材に成功すると思ったのだろうか？ 失敗したので送り返してくれているのだろうか？

混乱していた。

あぜくら駅に着いてキップを買い、ホームにいくと、3時間に一本の新宿直通の『みずき2号』にうまいぐあいに乗ることができた。車内は40パーセントぐらいの乗車率だった。電車が走りだし、ホームを離れると美穂は決心したように言った。

「わたし、やっぱり書くわ。写真がなくなたって、全ては私達の頭の中にあるのよ。記事になるかならないかは編集長まかせ。圧力がかかれば駄目だと思うけど、わたしが書かなくちゃいけないのよ。山口さんもそれを望んでいるのだと思うわ。だってこの祭の情報を流してくれたのは山口さんよ。取材には失敗したけれども、書いてほしいのよ。突破口を開いてほしいのよ！」

僕は黙っていた。それが山口さんに対する意地だとしても、美穂が考え抜いた結論だとわかっていただけだ。美穂は鞆から原稿用紙を出してスラスラと書き始めた。ほとんどの乗客が眠っていた。次の駅で乗ってきたのは男がひとり。ウイスキーの小瓶を片手に、僕達の斜め後ろに座った。怪しい人はいない。僕達を殺そうとした人達は、あの車の中で死んだと思っているのだろう。

美穂は相変わらずペンを動かしている。僕は動く景色を見ていた。さっきの駅で乗ってきた男がトイレに立った時、チラリと僕達を覗いたような気がした。奴らの仲間だろうか？ でもこの電車に乗っていることは知らないはずだし、僕達とは違う駅から乗ってきた男だ。仲間のはずはない。その男は酒を飲んでいるからだろう、フラフラしながらトイレから戻ってきて、僕達の目の前で言った。

「おまえら暗いぞ！」

僕達は無視した。

「聞こえねえのか」

すごまれても答えなかった。

男はブツブツ言いながら自分の席に戻った。そのうちに眠ってしまったようだ。ただの酔っばら이다。相手になっちゃいけない。

それにしても今自分が体験していることが、現実だと思えなかった。夢の中の出来事ではないだろうか？ 去年、千春を亡くしてから現実離れしたことが続いている。それまで何事もなかった生活が恋しかった。リズムカルな電車の走行音と、美穂の奏でるペンの走る音を聴きながら浅い眠りについていった。

僕が気が付くと、新宿駅までもうすぐだというアナウンスが車内に流れていた。美穂がペンを置く。後ろを覗くと、酔っばらいの男も起き出したようだ。

目が合ってしまった。

「何見てるんだよ。バカヤロウ！ 馬鹿にしやがって！」

起きたばかりの充血している目でにらみ、男は胸元からサバイバルナイフを取り出し僕に向かって振りかざしてきた。急なことだったので避けきれず、肩を刺されてしまった。

「痛い！」

続いて、お腹も刺されたようだった。押さえた手の平に熱いものが流れ出てくる。

「キャー！」

美穂の叫び声が聞こえた。男は美穂にもナイフを向ける。視線に入った美穂の首筋に男のナイフは吸い込まれていった。美穂の首からほとぼしる血液が車内を濡らした。

「やられた！」

でも声にならない。

状況を知った車内の乗客が声を出し始め、逃げようとパニックに陥っていた。その時ちょうど電車は新宿駅のホームに滑り込んでいた。薄れる意識の中で、警察官が車内に入ってきて犯人を連行していくのを見ていた。警察官は僕の横にきて顔をのぞき込んだ。美穂の顔ものぞき込む。

「助けてくれ...助けてくれ...」

声にならない声をはりあげたが、やはり音にならない。

その警察官は美穂の書いた原稿用紙を取り上げた。

証拠にするのだろうか？ いや違う。奪われたのだ。

警察官はニヤリと笑った。この警察官はまともな警察官じゃない。僕達を助ける前に美穂の原稿用紙を捜しているのだ。もしかしたらあの祭を守ろうとしている奴らの仲間なのかもしれない。現れるのも早すぎる。事件は起きたばかりなのだ。

担架がきて救急車に乗せられた。

「原稿を...原稿を...」

原稿を返せと言いたかったが声が出なかった。救急車はサイレンを鳴らしながら走り出した。寝ている僕を白衣の男3人が見おろしていた。酸素マスクをかけられる。

美穂はどうしたのだろうか？ 首から血が吹き出していたが、無事だったろうか？

見おろしていた男のひとりが言い出した。

「女の方は？」

「死んだ」

死んだ？

美穂が死んだって？

「こいつは？」

僕のことだろう。瞼を開かれて覗かれる。

「意識はあるみたいだな」

「そうかまずいな」

その男は手際よく注射器を取り出し、何やら薬品を吸い上げた。そして、容赦なく僕の首筋に針を立てた。

殺されるのか？ この治安国家で...

こいつらは、あの祭を守っている奴らの仲間なのだろうか？

「刺した男は？」

「精神病院行きでしょう。でも半年もすれば出てこられる。精神病の治療は進歩したからね」

結局...僕達だけが死ぬことになるのか。暴れようとしても身体は動かない。涙だけが流れ落ちる。

男の中のひとりが笑みを浮かべながら言った。

「こいつ泣いているぜ」

僕はくやしさの中、だんだんと意識がなくなっていく感じを味わっていた。

ニュースを知った山口オーナーは自分のノートに西川美穂と田村洋一の名前を書き込んでいた。そのノートには青木千春と何人かのジャーナリストの名前が載っていた。全てここ数年の間に式之神祭のために死んでいった人達だった。山口オーナーはため息をついた。

「まだまだ足りない。国を相手のスクープだ。奴らにもっと殺させなくては、記事にならない。来年はもっとジャーナリストを送り込むしかないか...どう処理するか見物だぞ」

山口オーナーは知り合いのジャーナリスト達に電話をかけ始めた。